

ウォード総長のこと

大 下 尚 一

去る六月、アーモスト大学のJ・W・ウォード総長が、バーバラ夫人と令息アンドリュウ君を伴って、同志社を訪問された。

昨年学長として山本浩三氏がアーモストを訪ねた際、ウォード総長にぜひ同志社に来てほしいと招待されたと聞いていたが、それが実現したわけである。ウォード氏は、七一年夏総長に就任して以来、一日も早く同志社に行ってみたいと念願していたとのことで、この訪問期間中、実に熱心に同志社と日本を知ろうとつとめておられた。同志社大学は、この機会にウォード総長に名譽学位を贈り、アーモスト大学が長年同志社にあらわしてきた友情を謝すとともに、同総長の歴史学者としてのすぐれた業績をたたえた。

住谷総長、松山学長をはじめ同志社の責

任を負っている面々と、同志社とアーモストの関係が今後一層のりあるものとなるよう懇談されたのはもちろん、大学部長会のメンバーとも、両大学がかかえている諸問題をめぐって自由に意見を交換する機会もたれた。アメリカ研究者や歴史学者など専門を同じくする人とはもちろんのこと、できるだけ同志社の教員と話したいとのことであった。宿舎にもしていたアーモスト館の寮生とも、寮の食事を共にして交わり、京都で勉強しているアーモスト大学やほかの、アメリカの大学の学生たちとも何回か会っておられたようである。そのうえ講演が二回。二つとも実に熱心に話され、懇切に質問にも応じるといったぐあいである。アメリカ人が精神的なのは見られているが、ウォード総長のスケジュール

は、はた目にも気の毒なほどであった。このようなヘビー・スケジュールには、同志社アーモスト館長オーテス・ケリー教授のアドバイスにいささか責任があると思うのだが、むしろケリー教授に言わせれば、少しでもよく同志社と日本を知りたいというウォード総長の熱意と、同志社当局をはじめとしてウォード博士の来日を願っていた各方面の希望とを調整しようとずい分苦勞したということになるだろう。

こういう私も、ウォード総長には同志社訪問中ぜひ二回講演してもらうべきだと主張した犯人なのである。このひけめもあって、多忙な日程のなかに組まれていた「インランド・シー・トリップ」に藤倉教授と交替で同伴をする光栄をひきうけた。このような結果がまた、この拙文を綴る羽目になったようである。アーモスト大学総長の同志社訪問についてであれば、もつと責任ある内容の記事を書かれる方もおられるはずであろう。しかし、今度のウォード総長の訪問は、具体的なプランをいくつかひっさげてきて、プラクティカルに検討していくといったいわゆるアメリカ的のしきたりで

はなく、できるだけ同志社と日本を知ろうということに主目的があつたように見うけられた。これが無遠慮にもこの記事をひきうけた第二の理由である。

ここで学者としてのウォード博士について一言のべておきたい。J・W・ウォードの名前はジャクソニアン・デモクラシーについての業績で知られ、わが国の学界でもその来日を望む声が少なくなかつた。ジャクソンは一八二九年に就任した第七代大統領で、ワシントンヤリンカーンなども並ぶ強力な大統領である。とりわけかれは最初の西部出身の民衆的イメージをもつ大統領で、この時代にデモクラシーが制度や文化に広がった。これはジャクソニアン・デモクラシーと呼ばれる。しかしはたしてこのデモクラシーとはどんな価値観をもつていたのか、何故このような理念が定着していったのか。ウォード博士はこの問題を、集団や制度をささえる人々の意識にまで降り下げて研究した。アメリカの民主的伝統を無自覚に肯定するのではなく、その実体を再検討しようという若い歴史家が、第二次大戦直後からめざましい働きをしたのだ

が、ウォード博士はその一人なのである。

博士はまた文学に造詣が深い。その業績は、新しい社会科学の方法と文学や思想など文化に対する洞察とを総合する試みでもある。この点で、博士が総長になるまで、文化・社会の総合的な研究と教育とを一つの柱とするアーモスト大学で、教授として活躍してこられたこともうなずけるのである。七〇年一月、私がアーモスト大学を訪ねたとき、当時のプリンプトン総長の夫人が、自分はウォード教授のクラスを聴講しているが実にすばらしい、とその内容を熱心に話された。ウォード教授の授業ふりと、総長の夫人がクラスを聴講するようなことが何の不思議でもないアーモストという大学の雰囲気とが結びついて感銘深かつた。ウォード博士はまだ五一才、歴史家としても、その研究の完成が期待されていた。それが、ベトナム戦争を契機としてさまざまな変化がアメリカ社会にあらわれ、大学教育もこれを反映して再検討が迫られようとしているとき、総長におされたわけである。今度ウォード総長には、「ジャクソン時代」というセミナーを、関西在住のアメ

リカ研究者を相手にしていただいたが、それは、民主主義理念を、ジャクソン時代だけでなくアメリカ史全体の展望から見なおし、しかもアメリカ以外の諸社会との比較をふまえるという、意欲的なものであつた。ウォード総長は訪日を個人的に大きな体験だと喜び、さらに日米の学生や研究者の広い交流の意義を確信したと言っておられたが、これは総長というアドミニストレーターの立場のみでなく、このような一学究としての願いでもあろう。

ウォード総長は、はえぬぎのアーモスト人ではなく、ハーヴァード大学を出て、ミネソタ大学で学位をとり、一九六四年アーモストにくるまでは、プリンストンの教授であつた。このことについて話しているとき、あまりに早くアーモスト人になり切つたのが自分でも不思議なくらいだが、今度同志社にきて、もっとアーモスト人になれたような気がする、と笑つておられた。これがウォード総長が同志社から持つて帰られたよき土産であらう。

(大学文学部教授・アメリカ研究所委員長)